

思い恋心中

平 龍生

1

白い壁に囲まれたその部屋は陽当たりがよかつた。心を和らげるためか、窓際の場合には赤いシクラメンの花鉢が飾られていた。川合は赤いシクラメンの花鉢が飾られていた。川合芳樹は精神科医に呼ばれて、この静かな一室を訪れた。妙な気分である。三週間ほど前に、東京・練馬署の刑事が、こつそりと川合を自宅とは離れた場所に呼び出し、事情聴取をした。半年ほど前に別れた工藤雅美について、交際していた当時の状況を聞きたい旨の連絡を受けた。その雅美は縊死自殺を遂げていた。川合にすれば雅美の自殺事件は寝耳に水の話でこの時は少なからず動揺した。

一応は自殺の線が出ていたが、警察は他殺の疑いもありという見方も持っていたようだった。その時は、自殺当日の川合のアリバイ調べと交際の過程を聴かれただけで、川合自身の行動には疑わしいところはなかったので、簡単な事情聴取に終わった。

縊死に至る心の経緯を追調査したいので協力してくれと精神科医の男から再度、連絡があり、拒否できることでもないので、川合は今日、大学病院の一室を訪れことになったのだ。川合は指定された日時通りにやって来た。自身は妻子持ちの身で、二人は不倫の仲だったから、気遅れしているところもあったが、気懸かりなことは早く片づけたいという思いが強かった。これは寝覚めの悪い話とも言える。

「立ち入ったことをお聞きすることになるかも知れませんが、工藤雅美さんはわたしのところに通っていた患者の一人で、精神療法という意味でわたしといろいろ話し合ったことがあるのですよ」

四十半ば頃と思われる医師の資格を持つ男が言った。優しい目をしており、やや、小太りタイプなので、印象からは包容力がありそうな男に川合の目には写った。

中尾とその男は名を名乗った。

白衣など着ていず、中尾は背広姿のまま、ゆったりと椅子に背をもたせ、川合を迎えた。薦められた回転椅子に川合は腰を掛けた。

中尾と一対一で川合は向かい合う。

「川合さんと工慶雅美さんの関係をどうこう言うつもりはまったくありませんので、その点、どうぞ、ご承知おき下さい。実は工藤雅美さんは日記帳を残しておられまして、あなたとの交際の一部が記述されています、それで、今日、この場にお呼びしたというわけです」

日記帳に自分の名があるのは警察でも告げられた事だったので、川合は素直に頷いた。

「わたしの質問はOKですか？」

尋ねる余裕も川合にはあった。

「結構ですが、差し支えがある場合は、その

旨申し上げますので、ああ、それから、お二人が肉体関係にあったことを前提の上で、話は進めさせていただきますので、その点もご承知下さい」

「ええ、そのことと、彼女が自殺したこととは何か関係があるのですか？その点については警察の方には訊かれませんでした」

「まだ何とも。そのへんの事情を知るためのヒヤリングですから、川合さんのご協力もいただきたいということですよ」

「知り合ったのは彼女に駅で声を掛けられたから。それに、別れたのも一方的にわたしやさよならを言われて。それに、付き合った期間も半年、いつも、彼女主体で、特にお話するようなことはないと思うのですが」

「それは警察でもお話しになったことですよ。わたしのほうはお二人の付き合い方のもっと別の面でのことを知りたいと思ひましてね。いやいや、それにしても、川合さんは雅業さんの亡くなったお兄さんと、とても、感じが似ておられる。雅美さんはそのような

こと、あなたには話しませんでしたか」

話の筋道とは違う角度から、中尾はまず話を進めた。

「聞いておりません。そういうことは…」

どこで手に入れたのか、中尾は一枚の写真を次に川合に示した。雅美の兄だというその写真の人物は、細面で眉毛が濃くはつきりしており、切れ長の目で、少し目尻が上がっているところが、川合とそっくりだった。

瓜二つとはいかないが、印象は確かに川合によく似ていた。

ただし、その写真は十代後半に写されたもので、二十九歳になる川合と比較すること自体無理があるように思えた。

「大事なことをお聞きします。雅美さんは川合さんが初体職の男性だと日記にも記しています。それで、本当に立ち入って申しわけないのですが、その、川合さんとしては雅美さんと特異な体験をなされたということはありますか？」

「特異な体験と申しますと…」

川合は言い淀み、言葉尻を濁した。

通勤電車の途次、川合は雅美に声を掛けられ、会う日を約束させられた。

信じられないような話だが、雅美はその日、自分のほうから抱いてくれと川合に告げた。雅美が初体験だったというのは、よくわからない話だった。

そのような実感は川合には余りなかったからである。

が、特異な体験というのには川合は心当たりがないではなかった。

川合は二人が結ばれた日の出来事を、今更のように思い起こすこととなった…。

2

その日は春まだきの寒い風の吹く日だった。予めシテイホテルには部屋が取ってあつて、川合と雅美はそのホテルのレストランで食事をした後、自然の成り行きで、二人切りの時間を持つことになった。

すべて雅美のペースで二人の出会いが進められた。十九歳になったばかりだという雅美は長い髪を少し神経質そうに何度も搔き上げた。色の白さと、つぼみを思わせるやや小さ目の唇、顔が小さいのでその分、見開かれた目は大きく見えた。

全体の印象としては、自分から男を誘った割りにはおとおどしており、無理をしていると言った感は否めなかった。

男心をそそると言うよりは、何か、ずっと抱き締めていてやりたいような可憐さが雅美にはあり、川合はその点に心惹かれた。

ややその表情が寂しく見えたせいかも知れない。レストランで食事をしている時の会話は、極く普通のものだった。

短大の一年生で国文学科に籍を置いていること、それに両親が離婚したことで、居場所がなくなり、いまは一人、アパート暮らしをしていることなどを、雅美は問われるともなく語った。

好き嫌いの感情で川合は雅美に対していた

のではなかった。通勤電車で見かけた顔ではあるが、特に工藤雅美という女性が印象に残っていたわけでもない。

誘われた時、雅美がかなり、突き詰めた表情をしていたので、断る口実が直ぐには見つからなかった。

それに、男である以上、浮気心はある。美人の部類に入る若い女性に心動かされるのもこれまた当然のことではあった。

部屋に入り、二人切りになった時、今度は川合の方が饒舌になった。

二人はいい関係になれそうだと、浮わついた心情を川合はさらけ出したりもした。一種の男心の照れというものであった。が、雅美は聞き流しただけで、バスルームに一人姿を消した。いったん、川合はたばこに火を点けたが、直ぐに揉み消す。落ち着きを失くしている自分がこっけいに思えた。

（話がうま過ぎるよ。いくら一目惚れされたからって、こうもうまく行くものかな。いや、若い女の子は、今時、こんなことに何の抵抗

もないって言うからな。いいんじゃないか)

川合の独り言は、バスルームのシャワーの音を聞きながらの呟きだった。

慣れたふうの女の所作？

この時の川合はそのように考えていた。

先にシャワーを使うこと自体、もの怖じしない態度だと言えた。バスタオルで身を包んだ雅美は、浴室から出て来た時、笑うともなく笑い、川合のそばを擦り抜けた。

代わって川合がシャワーを浴びた。

熱い湯で肌をたたく。気持ちが高ぶって、すでに彼の下半身にあるものはそそり立ちのかたちを示していた。

雅美は一人、ベッドに入り毛布にくるまっていた。固い表情のまま川合を迎える。

両目は瞬きもせずに見開かれており、緊張しているのが川合にはわかった。

「そばに行ってもいいかな」

言わずもがなのことだったが、この場の男と女の会話としては当を得ていた。

雅美が頷いたように川合には見えた。

「わたし…。あの、変なんです」

唐突な言葉が、雅美の口から漏れた。川合は初め、その意味を凶りかねた。

雅美は意を決しかねていたが、自ら毛布の裾を少しずつたくし上げて行った。

川合は眩しいものを見る思いで視線を灼きつけたのだが、黒いロープに縛られた両の足を初めに目にした。

綿製品らしいそのロープはしつかりと両足首に喰い込んでおり、雅美は性の行為を担否しているように見えた。

だが、雅美は心持ち足を開き、腰全体を持ち上げるようにした。淡いスタンドの明りの下で、川合は儚なげに生え染めている薄い陰毛地帯をみとめた。

雅美は秘された部分をそうやつて見せることで、彼を挑発しているかのようにだった。

ロープの持つ意味について問い質す前に雅美が口を開いた。

「わたし…こうしないと…その、だめなんです」

何かを伝えようとしているのだろうか、川合は不可解な思いを抱いただけだった。

S Mの一シーンを思い浮かべたが、それとも違う。むしろ、雅美は男を受け入れようとする態度とは裏腹に、自らの心のほうは、頑なに閉ざそうというかに思われた。

性の行為に身を任そうとする自分を罰しているようでもある。

この時、川合は雅美の足元に跪（ひざまず）いていた。毛布の端に手を掛けようとしていたのだが、途端に、雅美の縛られた足がぶるぶると震え出したので、その手を引っ込めた。雅美の足指が反った。

雅美の腰全体がシートからゆっくりと持ち上がった。そうやって、雅美は自分なりに受け入れ態勢を取った。

川合の目にはそう映った。

震えは下半身全体に及び、雅美は毛布の端を両手でしっかりと掴み取っていた。その手にも、震えが伝わってきた。

「抱いて下さい。あの、このまままで…わたし

、平気です。自分から川合さんを誘ったんですから」

雅美はきつぱりとした口調で告げた。

いつか、雅美の震えは治まっていた。

川合が口づけをした時、雅美は両腕を川合の肩にまわしてきて親愛の情を示した。

雅美の乳房は裾野がきゅっと持ち上がったかたちで、乳首が上を向いているのが、魅力的だった。前戯の行為中、雅美は喘ぎの聲はほとんど発しなかった。

川合に身を任せたまま、雅美は結合のひとときをじっと待っているふうであった。

もちろん、初体験かどうかの会話のやり取りはなかった。川合は雅美の下半身に手を伸ばした時、まだ、緊縛されたままの黒いロープを外すべきかどうか迷った。

だが、雅美が、「抱いて下さい。このままです」と告げたので、川合は雅美の望み通りにしてやるべきだと思った。

指で雅美の開口部を探った時、もう、その部分は濡れの液で充たされていた。

川合が挿入の姿勢に入ろうとしたら、雅美がそれに合わせ、屈曲位で応じた。

両脚が高く撥ね上げられた。

黒いロープは両の足首に喰い入ったままだった。川合は片手でその緊縛された部分を支持し、フォロースルーの姿勢を持した。

雅美が腰を動かさず、受け入れたので、男のものには抵抗なく埋め込められた。小さく、雅美は呻いたようだった。

深く、張ち切ったものが押し入った時、また、雅美の下半身がぶるぶると震え出した。

対面していたので雅美の顔の表情も読めた。眉根に縦皺が寄っていた。

小さ目のつぼみのかちちに似た唇もわなわなと震えていた。

「わたし：」

と、雅美は何かを呟いたが、川合には聞き取れなかった。声を押し殺し雅美はしばらく全身を揺すられていた。

腰の震えが小さく伝わるのだけが、川合の気持ちを高ぶらせた。

雅美はこの時、痛いとも言わなかったのも、川合は七、八分は腰を動かさせていた。

やがて、川合が放った時、雅美は両手を差し出し、川合との合体を求めた。

川合は雅美に上体を預けた。その後雅美が縛ったままの両脚をそそつと伸ばした。いつか、雅美の体の震えは治まっていた。

「ありがとう。わたし、こうしたかったの。理由は聞かないで。わたしって変な人なんだもの。きつと…」

そのあと、雅美は黙りこくった。気になり、川合が雅美の表情に視線を向けたら、涙が雅美の頬を濡らしていた。それでも、雅美は健気な顔に立ち戻り、自分で涙を拭くと、シャワーを浴びて来るよう川合に言った。

川合はその言葉に従った。

いつの間に、ロープを足から外したのか、シャワーを使って出て来ると、雅美はベッドの端に座り控えていた。

もう、何事もなかったかのように、いたずらっぽく首を傾げ、小さく笑ってみせた。

その日を契機に、二人は二週間に一度ほどの割合でシテイホテルの一室で会った。

雅美はその都度、ロープを持参し、同じような抱かれ方をした。

川合はその理由は追求しなかった。

刺激的な気分も川合は少しは味わった。

そんなある日、自分で両足を縛っておきながら、雅美は抱かれることを拒否したことがあった。雅美はなぜか泣きじやくり、そのあと、自分を戒めるようにいつもよりきつく、両の足首を強く縛った。

この時、雅美は川合に「結婚して欲しい」と懇願した。川合が妻子のある身であることは雅美も承知の上での逢瀬だったのに、少しく、雅美は取り乱した。

もちろん、叶わぬことだったので、雅美はその気まぐれを、数刻後には笑いでごまかした。抱かれることを拒否した雅美だが、川合を受け入れる積極性もこの時は見せた。

何回か抱き合って分かったことだったが、

雅美は少し情緒不安定なところがあった。

結局、雅美はその理由は告げず、川合の会社にもう会えないと、半年ほど前に電話して来たあと彼の前から姿を消した。

連絡先は最初から雅美は川合には教えていなかったもので、川合は雅美を探す手盾を失った。そんなわけで、その後は、雅美の消息を知らぬままに、川合は無為な日々を打ち過ごしていたのだった。

3

工藤雅美の自殺事件が、他殺の線もありとされたのは、川合と別れた後、雅美が犯罪事件に巻き込まれていたからだった。

精神科医の中尾が警察の依頼で、雅美の性遍歴を調査することになったのは、その事件が特異性を帯びていたからである。

雅美は縊死自殺を遂げていたが、実はその前に、二人の男に強姦されている事実が確認されており、その場の状況から、偽装自殺の疑いもあったので雅美の遺体は司法解剖に付

されていた。

自分の住むアパート裏の林の中で、雅美は樫の木の枝にロープを吊り下げ首を吊った。

この時、両の足首は黒い木綿製のロープで強く縛られていた。立木の低い枝に首吊りのロープは結ばれていたのも、一応はそのような状態で、縊死自殺を遂げるのは可能との判断が示されていたが、他殺の線もありと見て、警察は捜査を始めたのだった。

別件で逮捕された二人の強姦犯はこの工藤雅美の事件に関して奇妙な供述を行っていた。二人の強姦犯は車を使い、女性を林の中に連れ込み犯すという手口で何件かの強姦事件を重ねており、警察が情報により内偵中、不審の行動を取る二人の若い男たちが捜査の網に掛かったのだった。

この間の事情については、中尾が婉曲（えんきよく）な表現で川合に説明をした。

雅美は独りで暗い林の中を真夜中にさまよいついており、二人の男たちの前に姿を現すと、自ら望んで「わたしを強姦してくれ」と頼み

込み、その時、雅美は持参した黒いロープで、男たちに両足を縛って欲しいと願い出、その通りにさせた上で、男たちの陵辱に身を任せたといい。

話が出来過ぎているので、警察の取調官は一笑に付したが、別々に取調べをしたのに、作り話にしては細部の点で強姦犯二人の言い分は一致していたので、警察は事実確認の要を認め、中尾医師に工藤雅美の性行動を調査させることにしたのだった。

「つまり、被書者が自ら望んで、そのようなことを申し出るものかどうか、警察は疑っているというわけです。しかし、本人の残した目記帳にも、一部、ロープに関する記述があり、いつも性体験の際にロープを用意するよなことがあったのだとしたら、この限りではありません。わたしのいちばん、知りたいことはこの点に関してです。川合さんは雅美さんと何度かの性交渉があった。何か特異な点はなかったかと初めにお聞きしたのは、このへんの事情を知りたかったからなのです」

中尾医師は改めて、川合に質問を發した。川合は領いた。心当たりの事実を、中尾医師に語る必要があることを川合は認めざるを得なかった。川合は二人の情事の様について、重い口を開いた。

4

工藤雅美が記した日記帳の一部から、川合は彼女の心の軌跡を知ることになった。

その日記帳を川合は中尾医師から提示された。多感な少女期の日々の事柄を綴った一文の中に、雅美の心の秘密は隠されていた。

十六歳の時に記された次のような告白文であつた。

『夏の夜のことだったから……。わたしは今でもそのように思うことにしています。あの日の出来事は兄にとつてもわたしにとつても、深い心の傷を残すことになったのです。わたしが十五歳、兄は十八歳の時のことです。二階にわたしたち兄妹の部屋はあり、夜は両親

は階下で眠っていました。蒸し暑い夜だったことをわたしはよく覚えています。その時のことを、こうして日記帳に記すのは、わたしがいつまでも、兄のことを忘れずにいるからです。空白のページになっているあの夜のことを、わたしは忘れてはいけないと思い、日記帳に記すことにしました。

わたしはお兄さんが本当に好きでした。それなのに、わたしは兄の心を傷付けてしまったのです。真夜中、ふと目覚めると、誰かが、わたしのベッドの端にうずくまっています。た。人の気配を感じてわたしはうっすらと目を開けたのですが、途端にわたしの体は金縛りに遇ったように手足が硬直してしまいました。わたしは自分の下半身が剥き出しになっているのを、その時、知りました。

そして、兄が足元にしゃがみ込み、わたしの恥かしい部分を、さつきから見えていたのだという事実を知らされたのです。まだ、兄はわたしが気づいているのは知らないようです。わたしは、なおのこと、体が動かさなくな

ってしまいました。

でも、その時は、わたしは不思議な体験をしました。両足を早く閉じようとしている意識が働いているのに、逆にわたしの足は開いて行くのです。そうすることで、兄を傷つけまいとわたしは考えていたのかも知れません。大きな声を出せば兄は窃視の現場をすべてわたしに知られるのです。

仲のよい兄妹なのに……。わたしたちの間柄が気まずいものになるのではと、わたしは思ったのです。だから、兄を驚かせまいと、わたしは身を固くしていたのです。

でも、わたしは息苦しさに耐えられずに、とうとう、ごくりと唾を飲み込んでしまいました。途端に、すーと体の力が抜けて、わたしの両足は閉じられていたようでした。

兄は慌てて、部屋を出て行きました。

わたしの下着を脱がせ、窃視していたというその行為の痕跡を止めた状態のままです。兄は翌朝からわたしの目を避けるようになりました。家族との食事の時も顔を出さず、一人

、気難しげに自分の部屋に閉じこもることが多くなつたのです。

あたしはと言えば、夜の時間を迎えるのが、怖くなっていました。その怖さの気持ちですが、兄の行為を許してあげたいという思いがち、わたしは自分の部屋の鍵を掛けるようなことはしませんでした。それどころか、わたしは扉を薄目を開け、この前の夜のように寝乱れた姿のまま、ベッドで眠っていました。わたしはあの夜のことは何も知らない。そんな思いをわたしは兄に伝えたかったのだと思います。何でもなかったかのようにわたしは振る舞っていたのです。

何日目のことか、兄がやはり真夜中にわたしの部屋の扉の外に立ちました。わたしの胸はどきどきし、頬が上気するのが分かりました。わたしは何かを待ち望んでいたようです。それが何かは十五歳のわたしにはわかりません。この前の夜のごとは、とても、恥かしい経験でしたが、わたしは、なぜだか、興奮して明け方まで眠れませんでした。

あの時、自分で下着を着けたあと、わたしはそっと指を下半身に忍ばせました。自分も罪を犯しているような気分酔って、わたしは自分の指の暖かさを楽しもうとしたのです。妙な気分のまま、わたしはオナニーの真似ごとをしたのでした。そのような体験はなかったわけではないので、むしろ、気持ちを鎮めるために、いつもより、時間を掛け、わたしはあの夜は指の遊びをしたのでした。

告白しますが、あの夜からわたしは夜中になると、そっと、女の人の感じる場所に指を重ねるようになっていました。兄が自分の部屋にやって来るのを心のどこかでは待ち望んでいたようなところもあります。でも、わたしの気持ちの中には罪悪感もありました。指の遊びに耽る自分をわたしは罰してもいました。ある夜から、わたしはそんな自分を戒めるために、両足をロープできつく縛ったのです。兄のことを思いながらオナニーをするーその行為を禁じるために、わたしは自分の心を罰していたのでした。

禁忌の思いを自分に確認させるために、わたしはロープを用いたのだと思います。

でも、何を考えていたのか、わたしは下着は身に着けずに眠るようになっていました。

兄はわたしの好きな男優に似ていて、何度かそのことを兄にも、口にしたことがあります。これは夢想到過ぎませんが、わたしはその男優となら一夜だけの恋をしてもいいと考えたことがあります。兄に似ているからその男優を好きになったというほうが当たっていたのかも知れません。わたしたち兄妹は、両親が不仲だったせいで、小さい時から庇い合って生きてきたようなところがあります。

母親が家出をし、父親の帰りが遅く、兄が小さなわたしを抱いて寝てくれたこともありました。

兄は部屋の外で、しばらく、わたしの寝息を窺っていました。兄はわたしの部屋にはとうとう足を踏み入れませんでした。その夜の事です。兄が去ったあと、ロープで縛ったわたしの両足がぶるぶると震え始めたのは

…。わたしは異常な興奮状態にありました。ロープの結び目がきつく両足首に喰い込んでいると考えただけで、その部分がなぜか、なお強く締まって来るのを感じました。

「お兄さん……」と、わたしは口の中で何度か呼んでいたようです。

禁じたはずなのに、わたしの指は恥すかしどころに触れていました。

兄は部屋の外にはいないのに、わたしは兄が自分の痴態をつぶさに眺めているという思いに捉われ、指の遊びに夢中になっていました。夏の終わり、両親が離婚し、わたしたち兄妹は離れ離れになることになりました。

わたしは母親と一緒に住むことになりました。本当は兄も母親と暮らすことになっていたのですが、兄は自分の意志で父親と住みたいと申し出ました。その結果、二人は離れて暮らすことになったのです。あの夜のことを兄は気に掛けており、そんな理由から兄はわたしとは離れて住む道を選んだように思えてなりません。その兄は一年後の夏、大学受験に

失敗したあと、誰にその理由を知らせぬまま首吊り自殺をしました』

そこまでの一文を川合は中尾医師に見せられた。日記帳の別のページには川合と初体験をした時のことも書かれているに違いなかったが、川合はその一文まで読みたいとは思わなかった。

5

「日記帳にはもつと詳しく、工藤雅美さんの性に対する心理部分の描写がありますが、かいつまんで申し上げると、彼女の場合、近親相姦に対する罪悪感から、ロープを用いてその行為そのものを拒否しようという心理が働いているのですが、同時に、兄への思慕の想いが昂じ、ロープに対する執着心が日増しに強くなって行く経過をたどることになります。ロープに執着するのは一種の異物崇拜症（フェチシズム）だと言えます。このケースでは間接的なものですが、その行為そのものへのこだわりの傾向が見られます。兄さんの死

後はその執着心は自分を責める自傷行為にと
かたちを変えて行くことになります」

中尾医師がそう注射を加えた。

「自傷行為ですか？それはどういう…」

川合はおもむろに口をひいた。

雅美と自分との特異な性体験については、
一部は、中尾が日記帳を通じて語ってくれた
あとだったので、川合自身は少しは気が楽に
なっていた。

「自分の住むアパート裏の暗い林の中をさま
よい歩き、その果てに、男たちに蹂躪される
に任せた。信じられないような話ですが、自
ら、雅美さんはそのような場を選んだのです
。自分が兄を死に追いやったと深く思い込ん
でいたふしもあります。そんな自分を罰する
ために、雅美さんは兄と同じ死に方を選んだ
。首を吊るという方法で。強姦常習犯の男た
ちですが、彼らがしゃべったことはたぶん事
実でしょう。自分を強く罰するために、雅美
さんは自己破壊の道を選んだのだと言えます
。つまり、雅美さんは兄さんと同じ死に方を

すること、この場合、お兄さんと一つの身と心を持つことができたと言いましょようか。

付け加えて言えば、お兄さんと雰囲気が似ている川合さんに身を任せたのは、お兄さんへの思いと重なったものがあつたのだとわたしは思います。何より、その時のロープを用いるという特異な設定が、そのことを雄弁に物語っているのではないでしょようか。結婚してくれと雅美さんはあなた方が別れる前に、川合さんに懇頼したそうですが、非現実の世界で、雅美さんは亡くなったお兄さんにあなたを重ねて合わせて見、そのようなことを口にしたのだとわたしは思います」

「お兄さんの代役というのがぼくに与えられた役柄だったというわけですか」

「川合さんに身を任せたのも、これは自傷行為の一つと考えられなくはありませんね。夏の夜の出来事の決着を雅美さんは自分なりにつけたのだとわたしは思います。それから、日記帳に記されていることですが、ロープで両足を縛る行為ですが、強く縛れば縛るほど、彼女の場合はそ

の心情とは逆に、両足は開かれて行くという状態が示されたようです。異常興奮をする状況が設定されることで、いつか、工藤雅美さんは性的なエクスタシーを得るようになっていったのだと思われまます」

中尾医師は一通り、説明をしたあと、これは個人的な見解だと断った上で、川合に告げた。

「川合さんだけが彼女にとっては、現実の物語に近いところにいる男性と思われたのではないでしようか。結婚話を口にしたのも、結婚生活をする事で自分の中で兄が生き返るという錯誤の意識があつたのかも知れませんがね。現実の話としては、仮面をかぶった自分を見付け出して生きるしか彼女には生き伸びる方法がなかったのでしょう。虚構の精神世界の話ですから、当然、結果が破滅することになります。彼女の場合は自らの死でその幕引きをしたことになりました」

暖かな陽射しが窓からこぼれ入っていた。

その春の陽光も、川合芳樹には虚構の世界

のここのように思えた。ある日、見知らぬ女性に声を掛けられ男と女の関係になった。そのことも、今は俄かには信じられぬ出来事であったように思えてならなかった。これらのことは、（幻の時）とやらを、川合もまた雅美と共に体験していたと言うことになるのであった。

（了）

